

# 初期ジャイナ教の教理

—bandha について—

杉 岡 信 行

## 序

ジャイナ教において、bandha (結縛) は、教理上重要な概念を荷っている。この用語は一般に、七つあるいは九つの概念から成立している根本真理 (tattva) の一つに数えられている。

*Tattvārthadharmasūtra* (以下 *TAS*) は、学僧 *Umasvāti* (*Umasvāmi*) の手になる、白衣・空衣の両派から権威ある綱要書と見なされているが、その第一章第四ストーリーには七つの *tattva* (以下 7 *tattva*) が次のように述べられている。

*jīva-ajīva-āstrava-bandha-samvāra-nirjāra-mokṣas tattvam* (*TAS* 1-4) 活命と非命と漏入と結縛と遮と滅と解脱とが「七つの」根本真理である。

ところで、*Umasvāti* は、この綱要書をまとめる時、初期ジャイナ聖典から大きな影響を受けているが、*tattva* の構成についても同様である。

さて、初期ジャイナ聖典では根本真理は、九つの句義 (*padārtha*、以下 9 *padārtha*) として述べられている。例えば、*Thānāṅga* 第九章には *sadbhāva-padārtha* として次のように見える。<sup>③</sup>

*na va sabbhāvapayathā pammattā, tam jāhā—*  
*jīvā, ajīvā, puṇṇam, pāvam, āsavō, samvāro,*  
*nirjāra, bandha, mokkho / (Thānāṅga 9)*

9 *padārtha* の 7 *tattva* とを比較して、その相違点を明らかにすれば、*puṇṇa* (*puṇya* 善) と *pāva* (*pāpa* 悪) が多いわけであるが、この二つは理論的に漏入 (*āsava*) の中を含めて考えられるところのことである。さら

に、bandha の位置に異同が確認される。すなわち、*tattva* においては bandha は *asrava* と *saṃvara* との間に位置するが、*9 padārtha* では *nijāra* と *mokkha* との間に位置している。

この相違をいかに受取ればよいであろうか。*ṭ tattva* も *9 padārtha* も概念相互の次第性が尊重される理論であると考えられるので、bandha の順位の異同は、その概念の意味性にも差異が予想されるかもしれない。

本論は、初期ジャイナ聖典 *Sūyagadāṅga* の第一篇と第二篇(以下 *Sūy I* と *Sūy II* とする)とから主な資料を提出し、その分析を通して bandha が、かかる *ṭ tattva* あるいは *9 padārtha* の一概念を荷うまでの過程について、そのアウトラインを描くことにある。なお、初期ジャイナ聖典は、特にことわりのない限り、*Jaina-Agama-Series* 版 (Bombay) を使用する。

—

根本真理 *ṭ tattva* において bandha は、どのように位置付けられているのであろうか。すなわち、我々衆生は——すでに輪廻的存在の中にあり、それゆえ——身口意の三つの行為 (*yoga*) をすると、それに応じて空間

に存在する業物質 (*pudgala* など) で非命に属する(が、活命 (*jīva*) に漏入 (*asrava*) し、活命と一体となって業 (*karma*) を形成する。この活命の中の業の形成が bandha (結縛) である。業は相続するので、それを断ち切るためには、苦行 (*tapas*) によって新たな漏入を遮り (*saṃvara*)、古い結縛を滅 (*nijāra*) するのである。そうすれば、活命は本来の精神性のみを発揮し、自由になる。それが解脱 (*moksa*) である。

ちひ *TMA5* 第八章は、bandha についての章であるが、ここにも初期ジャイナ聖典からの影響が認められると<sup>6)</sup>言われている。その第四ストーリーには業の四部門について明示されている。

*prakṛti-sthity-anubhava-pradesās tadvidhayah*  
(*TMA5* 8-4)

この部門は、本質と止住と威力と微点(の四種である)。

この四部門については初期聖典にも述べられている。例えば *Thānāṅga* 第四章には次のようである。

*cauvvidhe bandhe pannatte, taṃjāra—paḡatti-*  
*bandhe thitibandhe anubhāvabandhe padesa-*  
*bandhe /*

とか、あるいはまた、

cauvvīdhe kamme pannatte, taṃjāhā—pagadī-  
kamme, thitīkamme, aṇubhāvakamme, padesa-  
kamme /

とある。

また、第八章の第五ノートラには、業の本質 (prakṛti) であるいわゆる業の八分類が示されてある。

ādīyo jāhāna-darsanāvarena-vedanīya-mohanīya-  
āyuska-nāma-gotra-antarāyāh

第一番目 (の本質) とは、智と見の覆障と、感受と愚痴と寿量と個性と類性と障碍 (の業) とである。これら業の八分類についても初期聖典には、散見される。同じく *Thānāṅga* 第八章には、

jivā namattha kammapagadīto cīṇīnsu vā cīṇ-  
anti vā cīṇissanti vā, taṃjāhā—nāṇāvaramījjaṃ,  
darisaṇāvaranījjaṃ, veyarījjaṃ, mohanījjaṃ,  
āyamaṃ, nāmaṃ, gottamaṃ, antarātītaṃ /

と見える。

以上の例からだけども、*TMAAS* に示されている *Ban-dha* の内容と、初期シャイナ聖典に散見されるそれとは密接な関係にあることが理解される。

ちい、7 tattva の七つの概念からなる用語順位につ

いては一般に認められるところである。それでは 9 pa-dārtha には順位とごうごうが意識されたのじあべうか。順位とは、すなわち (一) jiva (二) ajiva (三) puṇṇa (四) pāva (五) āsava (六) saṃvara (七) nijjarā (八) bandha (九) mokkha の順位である。先にとりあげた *Thānāṅga* 第九章は、白衣派所伝の初期聖典であった。空衣派所伝の聖典に於ては 9 padārtha の順位の意識はあつたべあべうか。

三世紀ころの空衣派の学僧 Vattakera の *Mulacāra* は、同派の権威ある聖典である。この聖典の第五章の第六偈には次のように述べられている。

bhūd' atthenābhigadā jivājivā ya puṇṇa-pāvaṃ  
ca  
āsava saṃvara nijjarā bandho mokkha ya sam-  
mattaṃ (*Mulacāra* 5-6)

一から九の順位のごうごうは *Thānāṅga* 第九章の場合と同じことが確認された。この順位のごうごうは、他の聖典・論書においても確認され、その順位が厳格に守られていることが知られる。よって我々は、9 padārtha にあつては *bandha* が、*nijjarā* と *mokkha* との間位

置いておくことを確認する。

## 二

*Suyagadāṅga* は、第一篇と第二篇との二部構成になっているが、その第一篇は、*Ayāraṅga* 第一篇などと共に古層に属する聖典と見なされている。この章以下では、*Sūy* I と *Sūy* II とから *bandha* に関連する資料をとりあげて、*bandha* の起源がどうもつづき廻り得るかを試みるものである。

*Sūy* II の第二章と第七章とは、9 *padārtha* の成立に至る直前の状態を示すと思われる資料がある。それは、沙門に付き随う優婆塞達 (*samanavasagā*) が心得ているべき教義の内容となっている。

abhiḡaya-jiva-jīva uvaladdhappuṇṇa-pāvā āsava-  
saṃvara-veyyāna-nijjāra-kiriya-hikaraṇa-  
bandha-mokkhakusalā<sup>⑨</sup> (*Sūy* II-2: 7)

活命と非命とを了知し、善と悪とを認識し、漏入と遮と感受と滅と行為と工具と結縛と解脱とに通曉したる者は……

これから先ず言えることは、資料は十二の用語から成り立っているが、*veyyāna* (*vedana*) と *kiriya* (*kriyā*)

と *ahikaraṇa* (*adhikaraṇa*) との三つの用語を除けば、9 *padārtha* となり、その順位も一致を見る。次に気づくことは、これら十二の用語が三つの語群を形成していることである。すなわち、*jīva* と *ajīva* の群、*puṇṇa* と *pāva* の群、そして *āsava* から *mokkha* までの群とである。おそらく、十二の用語としては全体で次第的でありながら、*jīva* と *ajīva* の群、*puṇṇa* と *pāva* の群の独立的要素が残存しているかもしれない。

やはり、7 *tattva* の 9 *padārtha* も共に奇数個の用語から成り立ち、順位も尊重されていた。ところが、この資料をさらに注意深く見ると、偶数個の用語の中、*jīva* は靈魂を意味し、精神性を有する。一方、*ajīva* は靈魂に非ざるもので、非精神性・物質性を有する。そうすれば、*jīva* / *ajīva*<sup>⑩</sup> の組は、反対概念をもつ用語が組になったと考えられる。また、*puṇṇa* / *pāva* の組についても、前者は善性を有し、後者は不善性を有している。これもまた、反対概念の用語が組をつくっていると考えられる。そこで、このような反対概念の用語が一組をつくっているものを、「概念対」と呼ぶことにすると、*āsava* / *saṃvara* と *veyyāna* / *nijjāra* と *bandha* / *mokkha* 等の組も概念対の可能性がでてくる。

この二つは *veyanā* / *nijjarā* の一対をとりあげてみよう。また、*veyanā* (*vedanā*) の語義は、*vedanā* [感] 受と訳され、苦と楽の両極の感受を意味している。

しかし、特にジャイナ教で *vedanā* を言うとき、苦痛の感受を指す場合がよくあり、ここでは苦痛の意味であると思われる。一方で、*nijjarā* (*nirjarā*) は、*vyatī* 滅と訳され、7 *tattva* の中では、すでに結縛している業の滅を意味する。そして、業滅の場合は苦痛の滅については明言されていない。しかし、この一対の場合には、*veyanā* が苦痛であれば、*nijjarā* はその滅を意味すると考へることができ、*veyanā* / *nijjarā* の一対は概念対として成り立っている。

以上のことがもし認められるとすれば、9 *padārtha* では、「[苦]」感受の滅としての *nijjarā* である、7 *tattva* では業滅としての *nirjarā* であり、両者の概念に差異が存することになる。

この二つは *Sūy* I の第十二章第二十一偈は、*āsava* / *saṃvara* 2 *nijjarā* / *veyanā* の概念対を支持する偈文だと思われよう。

*aho vi sattaṇa viuttaṇaṃ ca, jo āsavāṃ jānati*  
*saṃvarāṃ ca /*

*rihāti kiriyavādāṃ // (Sūy I-12-21)*

下方で衆生に拷問を加えることや漏と遮とを知っており、苦と滅を知っている者は、行為論者と呼ばれるにふさわしい。

この二つは *āsava* 2 *saṃvara* 2 が対になっており、また、*dukkha* 2 *nijjarā* 2 が対になっている。 *dukkha* を苦痛の *vedanā* と解釈すれば、*dukkha* / *nijjarā* は概念対の可能性がでてくる。 *āsava* / *saṃvara* の一対は、それぞれが業に無関係であったとしても概念対であると言えよう。いずれにせよ、右のような偈文が、*Sūy* II-2: 7 のような資料の根拠となったかもしれないことは予想される。

### III

*Sūy* II の第五章の第十三偈と第十五偈から第十九偈までは、前章でとりあげた十二の用語から成る六つの概念対が見られる。では、第十三偈の *jivā* / *ajivā* の概念対から成る資料を見てみよう。

*natthi jivā ajivā vā nevaṃ saṇṇaṃ nivesae /*  
*atthi jivā ajivā vā evaṃ saṇṇaṃ nivesae // (Sūy*

命と非命がなければ、かくのごとく想念⑬もない。

活命と非命とがあれば、かくのごとく想念もある。

このような形式で、

bandhe / mokkhe (第十五偈)

puṇṇe / pāve (第十六偈)

āsave / saṃvare (第十七偈)

veyanā / niḥarā (第十八偈)

kiriṇṇā / akiriṇṇā (第十九偈)

が順次述べられてある。

ところで、インドのジャイナ学者 K. K. Dixit は、このような形式の一連の表現は、*anekānta-vāda* (不定性論) の初期の先駆と見なされるとする。

かかる *anekānta-vāda* が具体的に何を意味していたのか、今は詳かにしないが、我々が扱って来た五つの概念対がまとまった形で存在することは確認される。

やはり、こので一つ注目しておきたいことは、*bandha / mokkha* の概念対が最後には位置せず、*jīva / ajīva* の対と *puṇṇa / pāva* の対との間に位置しているという事実である。この事実は、他の初期ジャイナ聖典にも散見されることなのである。

#### 四

この章では、*Suyagataṅga* 第一篇から *bandha* に関する資料をいくつかとりあげ、*bandha* がジャイナ教の用語として取り込まれると思われる経緯を見てみたい。まず、*Sūy I* の第八章から次なる資料をとり上げる。

*dhavī bandhanūmmukke savvato chinṇabandha-*  
*ṇe /*

*paṇolla pāvagaṇ kammaṇ sallam kantati an-*  
*taso // (Sūy I-8-10)*

統御者は、束縛から解放され、一切の拘束を断ち切り、悪業を消散させ、最後に「煩惱の」鏝を抜き取る。

この文は *bandha* とはなく、*bandhana* という用語が使われている。*bandhana-ummukka* という複合語と *chinṇa-bandhana* という複合語における、それぞれの *bandhana* に語義の差異が存在するの否かについては詳かにしない。しかし、いずれにせよこの二つの *bandha-* の語義は、悪業 (*pāpaka kamma*) の語義に等しいか、あるいは *kama* 等の煩惱の隱喩 (*metaphor*) と考えられる鏝 (*saṭṭa*) に等しい語義を有しているかもしれない。

もしそうであるなら、この偈文における *bandhana* は、特に悪業の語義に近い場合、活命における業の結縛の概念に近いところにあるかもしれない。しかし、決定の根拠はまだない。

次にとりあげる偈文は、*Sūy* 1 の第四章 (*Uthi-parivāṇā* と名付られている) からのものである。ところへ、この章には、故 L. Alsdorf の校訂研究があり、<sup>⑩</sup> そのテキストを使用する。

*śīhaṃ jahā va kuṇimena nibbhayam egacaram  
ti pāsena /  
ev'itthiyāo bandhanāti samvudam egayam ana-  
gāram // (Sūy 1-4-1-8)*

恰も肉「のかたまり」によって、怖れを知らぬ単独の獅子を畏て「捕獲する」のように、そのように、女性たちは、制御した単独の非家「の修行」者を誘惑する。

表現は直喩 (*simile*) である。制御した単独の非家の修行者は、恐怖を知らぬ単独の獅子に照応している。女性達は、そのような修行者を誘惑し (動詞 *vbandh-*) たのであろう。それは、ちょうど肉の餌をしかけてある畏 (*pāsa*) と獅子を捕獲する (*vbandh-*) ようなものである。

この偈文に使用されている *vbandh-* は、描写対象にも比較の基準にも共通して使用されている。いくらりっばに見える主体であっても、一度、煩惱による行為に移れば、取り返しつかないことになるという隠れた意味を *vbandh-* は含みつつあるように思われる。

もう一偈、直喩表現から成る詩頌をとりあげる。

*je etam nabhijānātū micchadditthi anāriyā /  
miḡā vā pāsabaddha te ghāyamesant'antaśo //  
(Sūy 1-1-2-13)*

この「理」を承知せざる邪見の異端者は、無限に死に赴くであらう、恰も畏によって捕獲された鹿のよう

邪見の異端者は、愚かな鹿に照応する。「この「理」」というのは、この偈文の直前にある偈文で示されたジャイナのある教理のことであるが、それを知らざるがゆえの無智で、無限に死に赴く輪廻状態から脱出できない。それはちょうど畏によって捕縛された鹿のようであると言うのであろう。

直喩の比較の基準の中にある *baddha-* は、*vbandh-* の過去受動分詞である。これは、描写対象の中の *ghāyam esantī* (死に赴くであらう) という動詞句に照応し

ていると考えられる。したがって、描写対象の中には、*vandh-*に関する語句はないことになる。

## 五

*bandha* の成立と起源については、前章で扱ったような直喩表現であるとか動詞形の語句にその発端があると考えられている。直喩から隱喩へ移行する間に術語としての成立があると考ええる。

成立については、資料を *Sūy I* と *Sūy II* とに限ったのはクロノロジカルな線を出さんがためであった。*Sūy I* に散見された *bandhana* と同じ用語については、外教の資料をも考慮にいられて別稿を期す。

## 註

- ① Suzuki Ohira, 1982, *A Study of Tattvārthasūtra with Bhāṣya, with Special Reference to Authorship and Date*, Ahamedabad, p. 54 ff.
- ② *tatra* を別に句義 *padārtha* と称する場合があることについては、金倉田照『一九四四『印度精神文化の研究』一〇〇頁。
- ③ S. Ohira, 1982, p. 55.
- ④ 金倉田照『一九四四』一〇〇頁。S. Ohira, 1982, p. 55. なし。

⑤ *Uttarajñāyā* 29-37 に、このあたりの業論をコンパクトにした表現が見える。  
ajogī naṃ jive naṃ kamman na bandhai pu-  
vabaddham nijjareī //

⑥ S. Ohira, 1982, p. 64 f. *や* *Uttarajñāyā* 第三十三章がそのソースであるとする。

⑦ Kiyooki Okuda, 1975, *Eine Digambara-Dogmatik Das fünf Kapitel von Vaitakeras Mūlacāra herusgegeben, Alt- und Neu-Indische Studien* 15, Wiesbaden, S. 37.

⑧ Kundakunda の作 *पाँचशतिका* 116 *や* *Haribhadra-Sūri* の作と言われる *Prasamaratī* 189 *や* *Yasodeva* の *Nava Tattva* の冒頭部分には 9 *padārtha* がみられるが、いずれも順位に異同はない。なお、直前の状態を示す資料として *Isibhasyāyām* 第九章を考察されるべきであろう。谷川泰教、1988『*Isibhasyāyām* 第九章の研究』『高野山大学論叢』第二三巻参照。

⑨ *भारेल* が他の初期ジャイナ聖典に散見される。 *Vidyāhananattisūtra* 2-64; 14-112, *Nāyāhammahāhāo* 1-5, *Uāsagadāsāo* 1-31, 55, 56 *など*。

⑩ *jīva / ajīva* は、ジャイナ教の開祖マハーヴィーラに先だつて二五〇年といわれるパーサ (*パールシユバ*) の創始になるといふ伝承がある。

⑪ *āsava / saṃvara* が互いに対立概念であることを、次の論文参照。榎本文雄、1979『*āsrava*』の成立について——主にジャイナ古層經典における——』『仏教史学研究』第二二巻第一号、八七頁。

⑫ 長崎法潤、一九七四、「ジャイナの業思想」『仏教学セミナー』第二〇号、四一二頁等参照。

⑬ 想念 (saṃjñā, saṃjñā) のルビの意味は、覚智とか信仰などである。

⑭ K. K. Dixit, 1978, *Early Jainism*, p. 39.

⑮ *Thānāṅga* 例えは、第一章の冒頭部分。ただし、*jīva* / *ajīva* の対はならぬ。同じく第二章の冒頭部分参照。

⑯ *salla* (*salva*) にしろては、杉岡信行 (旧姓煎本)、一九

八七、「*salva* と *salla* にしろて」『宗教研究』第六〇巻第四輯、二七一号、一六六一—一六七頁参照。

⑰ Ludwing Alsdorf, 1958, *Ithiparinā. A Chapter of Jain Monastic Poetry*, II/ 2, S. 249-270.

⑱ 同様の直譯は、*Sūy* 1-4-1-9 に *baddhe mie va pāse-ṇaṇ* とか *Isibhāsyaṇin* 21-2 に *miga bajjanati pāsehin* などである。また、*Sūyamipāta* 39 に *mi-go*…… *abaddho* と遊の場合がみらる。